

社団法人私立大学情報教育協会

平成 22 年度 第2回歯学教育 FD/IT 活用研究委員会、議事概要

- I. 日 時 : 2010 年 8 月 24 日(火) 午前10 時～午後 12 時
- II. 場 所 : 私立大学情報教育協会事務局会議室
- III. 出席者 : 神原正樹委員長、齋藤孝親委員、岡本公彰委員、佐藤利英委員、
藤井彰アドバイザー、奥村泰彦アドバイザー、
(事務局)井端事務局長、森下主幹、渡邊職員

IV. 議事概要

平成 22 年度医学・歯学教育指導のための WS 資料について内容を確認し、モデルコアカリを改変する中でいかに ICT を導入するか、臨床実習の評価については問題点の抽出はなされているが、現状では適切な対応策が明確ではないという結論に至った。

学士力実現に必要な ICT 活用の具体的な検討について議論がなされた。医科では可視化が進んでいるのに対して歯科では進んでおらず、それも各大学間の教育見解に差が生じる理由の 1 つではないかとの見解が出され、各大学で教育画像がどの程度あるのかを調査することが確認された。また、PBL において学びのプロセスを見ることができるよう ICT を活用したシステムの構築が望まれることが確認された。

Competency of New Japanese Dentist の作成の未完成部分についての検討を継続して行っていく旨決定した。

討論内容

1. 平成 22 年度医学・歯学教育指導のためのワークショップ配布資料一覧(参考①)について

①資料を基にモデルコアカリと臨床実習についての事例が提示され、色々なことが教育に取り込まれているが消化されているのか、10 年先の歯科医師に何が必要なのかが具体的に描けていないのではないか、基本的な歯科医療の知識、態度、技能教育が揺らいでいるのではないのか、との意見が出された。これに対して、東京歯科大学の事例や昭和大学の 4 学部一緒の取り組みの事例について話題が出され、大学間格差が出ている現状においていかに取り組んでいくかが議論され、ICT の導入を提言することが重要であり、提言することで色々なことが可能となるのではないかと結論に至った。

②臨床実習の評価を教育の中でどのようにしていくのかが模索されている。臨床実習では本来技能評価であるのに、できるか否かを評価せず、やったか否かを評価している現状が報告された。また、臨床実習終了時の評価を OSCE 形式で行う事例、歯学部の症例シートと模型を使った実習の事例、生命歯学部の 5 年生の PBL の事例などが提示され、様々な問題点が抽出されている現状で適切な対応策が明確ではない状況である旨の結論に至った。

2. 学士力実現に必要な ICT 活用の具体的な検討について(資料 1～4)

①委員から事案として、ICT 機器を用いて教室において臨床での治療をライブで見せる教育システムの構築を模索しているが、患者さんの問題もあり現実的には難しい状況である事、また携帯電話を活用した教育方法での評価については、学生間に差が出るので難しいが、講義中における試験解答の時間短縮や教員側へのフィードバックにはなっているという状況が報告された。それに対してライブ講義は何を目的に行うのかが問われ、歯科教育へのモチベーションであってライブの必要性がない議論もなされた旨追加された。また、ライブで現場を見せる点について明海大学の1・3・5 年が病院実習の現場で高学年が低学年をそれぞれ指導する事例が報告され、実施に際しては様々な問題を伴う旨説明された。また治療状況をビデオでどのくらい撮影できるのか、臨床で治療を見せることで初めてディスカッションも活性化していくとの意見が出された。そして様々な治療症例の映像を大学間で連携してアーカイブすることはこれから重要ではないか、それを題材として授業を展開できないか、大学間の中でクラウドを使ってセンターへ預けて皆で共有することも大事なのではないか、医科では可視化が進んでいるが歯科では遅れているのが現状である、医療面接で撮影しているような画像が蓄積されているのか等意見が出され、各大学で現在どのような教育画像があるのか、どの程度あるのかを調べてもらうよう結論に至った。但し、集めるだけではなく、集めた画像を基に PBL など行って検証する必要もある旨提言された。

②委員から事案として歯学部の2年次 PBL の事例について、知識の深さと知識の広がりについてコンセプトマップを用いてまとめる方法が説明された。時間数、課題数、場所、評価方法等についての質問があったが、これに対してICTをどう導入するのか、また内容的に2年生というのは難しいのではないかと意見が出された。また、PBL の目的は何かとの質問に対しては、調べるという行動を学習してもらい、調べるときには知識の深さと広がり意識して調べる、という2点であることが回答された。また本科目は生涯学習の中で実施している手法で、生涯にわたる学習の基礎を教えるものであること、アカデミックスキルの教育も1・2年次に実施する必要があることが追加された。ここで物事の考える仕組みをモニターできるシステムを組んではどうかとの意見が出され、高学年でのICTを活用したPBLを開発できないか、グループディスカッションをビデオで撮影し、それをWebに載せてどう議論をすることで、どう結論を導き出したのか、学びのプロセスをWebへアーカイブしておいて、どのチームも見ることができる教材を作ってはいかがか。PBLで大事なのは振り返り学習なので、いろんな視点の議論があって、その中から最適化を図る、そのプロセスとしてICTを活用して議論させることも良いのではないかと意見が出された。最後にはモニタリングする評価者・ファシリテータも必要ではないかという意見が出された。また各大学間での連携を取って症例に対する見解をWebへ掲載して活用すれば、大学格差も解決するのではないかと意見も出された。これについてはiPadの有効性も示され、これらを踏まえて検討していく結論に至った。

③共用試験実施機構でコアカリ改定に向けての欧米の資料が提示され、コアカリの検討は今後日本の歯科医師が世界で通用するののかという点も視野に入れながら行わなければならない事項で

あり、歯科医師国家試験も英語での出題を検討している旨追加された。

3. 北海道医療大学歯学部と昭和大学歯学部の教育方法について

北海道医療大学のマルチメディアシミュレーションシステム、診療参加型の臨床実習、マネキンを使用した実習についての事例、そして昭和大学歯学部の歯科患者ロボットについて資料を基に説明がなされ、YouTube による昭和大学のニュース画像を確認した。これに対して、実際の教育効果がどれだけあるのかが重要である旨意見が出された。

4. 学士力の実現を目指す ICT 活用 授業の開発モデルの例示について

今後2回でどのように結論を出すのかということで、資料の説明がなされた。ICT を活用して大学間で連携して診療画像の映像をアーカイブする、また PBL を進めるに際して PBL のプロセスについて ICT を活用して画像化して共用しながら PBL の振り返りの教材に活用できないか、ロボットを活用する事例についてはどのようにすすめて行くかが検討された。またガイドライン、チェックリストあるいは学習ポートフォリオを Web 上に掲載して、卒業までに身につけなければいけない能力を大学としてフォローアップしていくことも大切ではないか、との見解も出された。これらについて今後まとめて行きたいという結論に至った。

5. Competency of New Japanese Dentist の作成の再検討について

昨年取り組んだものが未完成であるため、再度担当者を決めてまとめて行きたい。2006年版資料と本日配布された資料の両方を加味して今年度中に空欄部分をまとめる。そして、この中でICTをどう活用するのか、というところまで進めたい。

担当者を新年度の委員に変更しそれぞれの担当分野の内容を引き続きまとめることとなった。

6. 次回の開催日程

11月29日(月)、30日(火)、12月2日(木)、3日(金)のいずれか予定